
悪がまさに

柳秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪がまさに

【Nコード】

N3860Y

【作者名】

柳秋

【あらすじ】

不条理に動き歪む世界、荒さんでいく人々の心、そして欲望に支配された街：東京23区。導かれたかのように、ある男が再び姿を現した。皮肉にも、運命の歯車が動き始める……。悪がまさに生きる者達が互いに引き寄せられ、最悪のクーデターへと発展する。しかし、それはほんの序章に過ぎなかった……。己の信念を貫く23人が、運命に導かれていく……。

くプロローグく（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

くプロローグく

西の空が赤く染まり、鴉の鳴き声が聞こえている。

学生服の着こなし方を覚えた幼い二人は、いつものように小さな公園のベンチに座っていた。学校での出来事や友人の話など他愛も無い会話をしていると、不意に真剣な面持ちで優香は翔を見つめた。

「翔、大好きよ……」

あまりにも唐突だったので驚いたが、その後に見せた優しい笑顔が何よりも好きだった。

「俺もだよ」

優香の目を見て真剣に答えた。顔は強張り引き攣っている。苦手な笑顔を作ろうとしたらしい。そんな精一杯の姿を見て優香はキスをした。ベンチに寄りかかり、薄暗い空を見上げている。

「大人になった翔ってどんなだろ？」

「変わらない気が（んっ、これは……）」

何とも言えない感覚に襲われていた。

「そつだよね。どんな事があっても変わらないでね……」

足元を見ながら寂しげな表情で話し続けている。翔は嫌な予感が脳裏を過ぎり、話を止めようと必死になった。

「ちょ、ちよっと待ってくれ!!」

「今日はもう帰るね……」

目の前にいるはずの優香が透けて見える。翔は何度も瞬きをして
いると、優香はゆっくりとベンチから立ち上がり無言のまま遠ざか
って行く。

「くっ、ま、待てって……行くな!!」

抱きついてでも止めようとするが、思うように体が動かない。遠
ざかる背中から、聞こえるはずの無い声が心に響いた。

「もう……自分の……人生を……歩んで……」

辺り一面が暗闇に包まれ、優香の姿が吸い込まれていく。翔は無
我夢中になってもがき続けるが、何も変わらない。

「うおお……（我に眠りし……）くうっそお……動けっ!!」

離れていく背中を見つめる事しか出来なかった。

「うわぁっ!!」

布団を抱きかかえ上半身を起こしていた。日の出前なのか、静け
さの漂う暗い部屋で一人茫然としている。気づくと大粒の涙が髪を
濡らしていた。

第1話 噂 〜Bar Change〜（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第1話 噂 〽 Bar Change 〽

——練馬区：Bar Change——

翔の親友・昌也が経営しているBARである。

人通りが激しい大通りから、一歩外れた雑居ビル。その1階に店を構えていた。飲食店を営むには最適の場所とは決して言えない立地だ。態と覗けるようにしたガラス張りの入口からは、左手に8席のカウンター右手には4人掛けのテーブルが3つ置かれているのが見える。地道な営業活動と人当たりの良さで、店は連日の賑わいを見せていた。

日が沈み、ちらほらと常連客が顔を出している。昌也はカウンタ―越しに接客をしていると、携帯電話が鳴った。忙しい手を止めポケットから取り出す。

「はい……」

キッチンに向かいながら何度も応答するが、相手は沈黙を続けている。誰からか確認しようと、携帯画面に目を向けようとした瞬間だった。

「誰だっ！！」

相手の言葉に一つ間を置き目を瞑った。聞き慣れた懐かしい声に、思わず頬が緩んでいる。

「お前から掛けてきて誰だとは何だ！！……元気にしてんのか？」
「おーよ、久しぶりだな。今、羽田に着いた……」

電話の主は、親友の翔からだった。

「……はい！？ お前帰って来たのか？」

「おう、そろそろ頃合かと思ってよ……」

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

「まあまああ、そーゆーなって。ところでお前は……今何してんだ？」

「2年前に開業したBARを……」

「うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……切りやがった。店の場所知らないくせに……」

相変わらずの身勝手さに目を細め参った表情を浮かべている。だが、久しぶりの再会に心は躍っていた。

——数時間後。

……カラン。鈴の音が鳴り響き、いかにも悪そうな面構えをした4人組の男と誰かの彼女であろう女が来店してきた。二十歳を超えて間もない年頃だろうか、昌也は何気ない表情で見っていた。

「いらっしやいませ！ー」

女性店員の径子はカウンター席に案内している。男達は相手を威嚇する様に歩いているので、常連客は一斉に目を逸らした。席に着くや否や今日の出来事であろう話を始めた。

「翔さん、やっぱり強いっすねー」

一番端に座っている男が口火を切った。昌也はカウンター越しにグラスを磨きながら聞いている。

「あいつらの逃げっぷりは最高でしたよ」

「さすが、東京【五虎将】っすよね」

翔と呼ばれている男を持ち上げながら話が進んでいく。煙草に火を点け、男も満更でもない表情をしていた。女は見惚れた様子で見ている。おそらく彼女であろう。

「でも、大丈夫なんすかね。やつら【侠狼会】だつて言っていましたけど……」

「その名前を出せば俺たちがびびると思って言っただろう……それより、持って来たんだろうな？」

「あつ、はい。どうも、ありがとうございました!!」

手渡された包みは明らかに大金だと見て取れた。男は手馴れた手つきで中身を確認し、不敵に微笑んでいる。

「まつ、何かあつたら連絡くれよ」

「はい、よろしく願います!!」

3人は翔と呼ばれている男を囲むように席を離れ、頭を下げてお礼を言っている。終わるや否や、注文もせずにそそくさと帰って行った。帰る様を見ていた径子や常連客は、啞然としている。

男は優越感からか女を意識してか、格好つけて珍しい名前のカクテルを注文した。しかしそれは、ノンアルコールカクテルだ。知っているのか知らないのか。聞き間違いかと不安に駆られたバーテンダーが確認をしている。そんなやり取りを見ていた常連客がクスクスと笑っている。押し問答が始まりそんな雰囲気だ。

昌也は話題を変えようと口を開いた。

「失礼ですが、お客さんってあの有名な『翔』さんですか？」

突然の質問に、男は不機嫌な顔をして昌也を見た。

「……だとしたら？」

「いやあゝ、そろそろ帰られた方が……」

「何だと!？」

立ち上がり物凄い形相で睨みつけた。

「あついやつ、そろそろ……」

相手を怒らせてしまい慌てた昌也は、理由を伝えてなだめようとした時だった。……ガラン、鈴の音が強く鳴り響いた。

第2話 噂　くつまんねーの　（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第2話 噂　くつまんねーの

——大田区：羽田空港——

——時は少し遡る。

羽田空港に到着した翔は、第2ターミナルのソファ―に腰掛け電話をしている所だった。

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

……ピーコン……ピーコン。耳元で何かが鳴っている。

「まあまああ、そーゆーなって。ところでお前は……今何してんだ？」

……ピーコン……ピーコン。その音は鳴り止まない。

「2年前に開業したBARを……」

「（んっ）うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……」

ピー……。ピー……。

「切れた……」

充電が無くなったようだ。携帯片手に悲痛にも似た雄叫びを放つ。混雑しているターミナル、周囲の人々は係わりを恐れ翔の居場所を避けて歩きはじめた。

「まっいいや……」

気を取り直して立ち上がった。これといった手荷物は無く、手ぶらのまま羽田空港国内線ターミナル駅へと歩きだした。

ターミナルの広大な景色を眺めながらしばらく歩いていると、政治家と思われる人物が記者団に囲まれている。好奇心旺盛な性格からか、テレビカメラに映ろうとわくわくしながら向かった。

「カメラだけかよ……つまんねーの」

不機嫌な表情を浮かべている。テレビカメラが1台も無い事が気に入らなかったようだ。興味が無くなり駅に向かって歩き出した。

「……首相の参拝に対して……ありますか？」

無言のまま立ち去ろうとする政治家に、記者団から次々と質問が浴びせられている。必死で守る秘書の姿が痛ましい。

翔は品川駅に到着していた。山手線へ乗り換える為、構内を歩く。各方面への中継地点として役割を担うこの駅は、時間帯を問わず大勢の人々が行き交う。真っ直ぐに歩く事などままならない状態である。

人の波にのまれ歩いていると、突然、目の前が開けた。視覚障害者の男性が白杖を突いて歩いて来たからだ。翔も道を譲りすれ違う。「すいません、ありがとうございます」

「んっ？」

男性の言葉に、一瞬だが妙な感覚に襲われた。振り返り、遠ざかって行く背中を見ていた。人の波は、立ち尽くす翔を避けるように流れている。男性の姿が視界から消え、山手線へ向かって歩き出した。

山手線の外回り、渋谷・池袋方面に乗り込んだ。車内はそれほど混雑していない。

「とりあえず池袋で乗り換えるか……」

路線の案内図を見上げている。扉を開ける大きな音が聞こえ振り返ると、隣の車両から大工らしき服装をした大柄のおっさんが入ってきた。

「うつひゃっひゃ。ういゝ……」

ベロベロに酔っ払っている。周りの乗客は見て見ぬふりをしていた。何かやらかすんじゃないのかと期待の視線を送っている翔の居

場所に差し掛かると、目が合った。しかし、おっさんは電車の揺れに流されるまま、フラフラと次の車両へ行ってしまった。

「ちっ……つまんねーの」

何事も無かった事が気に入らなかったのか、不貞腐れたまま席に座った。

電車は目黒駅に到着している。翔は中刷り広告などを見て発車するのを待っていた。ベルが鳴り止み閉まるドアと同時にコギヤル二人が飛び込んできた。

「ちよつとお！！今のマジ際どくない？」

「もう超ーうける！！挟まれるかと思ったじゃん」

ギリギリの動きに興奮したのか勝手に盛り上がっている。そのテンションの高さは異常だ。静寂に包まれている車内で迷惑そうな表情を浮かべている乗客。

「……（ちっ、挟まれればおもしろかったのに）」

そんな目線でじっと見ている翔に気づいたのか、二人は目の前の席に座った。ミニスカートを気にする様子もなく、足を開き座っている。当然、下着が丸見えだ。

「……（じつと見るのも変だし、見て見ぬふりも嫌やな）」

目が泳いでいる。二人はチラチラと翔を意識して笑い、ヒソヒソと話し始めた。

「……（うわっ、最悪！！）」

居ても立ってもいられず、隣の車両へと向かった。

第3話 噂 ～修羅～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第3話 噂　く修羅く

——練馬区：某所——

翔は地元に着した。街灯が光り輝き、想いでと共に懐かしい景色を眺めていた。

「さすがに10年も離れると、景色が結構……変わってねえ!!」

街の変化を覚悟していたのか、ホツとした表情を浮かべていた。感慨にふけりながら地元を見歩いている。

すると、母校の制服を着た不良達が屯していたので立ち止まった。彼等を見つめ中学時代の懐かしい想いでに浸っている。しばらく眺めていると、煙草を吸い始めたり、飲んだ空き缶を道路に投げ捨てたり、通行人に絡んだりやりたい放題に振舞い始めた。

「かあ……いつの時代もやる事は一緒だなあ」

呆れた顔で見ていると、通りすがりのお爺さんに不良達が絡み始めた。調子に乗った一人が杖を蹴飛ばし、倒れ込む姿を見て大はしやぎしている。

「ちっ、あのガキ共……」

不良達に向かって歩き出した。杖を拾いお爺さんを抱き起こす。

不良達はただ傍観していた。

「お爺ちゃん大丈夫？」

「これは、どうもすいませんねえ……」

お爺さんは杖を突き、ゆっくりと歩き出した。翔は不良達に背を向けたまま、その姿を見届けた。

「おい見るよ、正義のヒーローが現れたぞ……きゃー、助けてヒーロー……!!」

背後から小馬鹿にした野次や空き缶を投げつけている。よほど気に入らなかったのか挑発を繰り返し、大騒ぎしている。

「あれ！！　もしかして翔かしら？」

通りすがりの女性は騒ぎに気づき集団を見ると、翔らしき姿を見つめ近づいて行った。

「見つけました……」

物陰から覗いている怪しい男も、騒ぎの渦中に翔の姿を発見し、何処かへ報告をしている。

終わる事の無い挑発を繰り返し大騒ぎしている不良達は、振り返った翔を見て言葉を失った。

「正義のヒーローの方がまだましだったかも……」

殺気を放ち悪魔の形相で睨んでいる。不良達は蜘蛛の子を散らすように逃げ去って行った。

「……　たく。俺もあんなだったのかなあ」

「良く言うわよ。あんたに比べれば可愛いもんよ」

横から聞こえる女性の声に、驚いた表情で隣を見た。

「……　弘美か？」

「生きてたんだねー。よかった……」

喜びのあまり人目も気にせず抱きついてきた。

「お、おい。離れろ……　（皆が見てる、恥ずかしいだろ）」

大騒ぎしていたからか、翔の周りには軽い人だかりができていた。

「はい、商店街の入口付近です。……　このまま尾行します」

再び怪しい男は現状報告を何処かへしている。

「あのねえー。みんな心配してたんだよ……」

「はいはい。それより、昌也の店を教えて（いい加減離れるよ）」

「もうっ……え〜とね、まー君のお店は……」

翔から離れ、昌也の店の場所を教えている。

「ありがと、じゃーな」

サバサバとお礼を言っ立去ろうとしている。

「ちょっと、まだ話が……」

「悪い、急いでんだ……また今度な」

手を振りながら逃げるように立ち去って行った。

翔は教えられた昌也の店へ向かわず、人通りの無い裏道へ進んだ。
人気の無い小さい広場に辿りつき、辺りを見回している。

「ふう、ここなら大丈夫だろ……誰だ？」

「……気づいていたんですね。流石です」

しばらくして薄暗い場所から怪しい男が姿を現した。明らかに暴力団関係者と思われる。

「ああ、お前か。……『重慶』は元気にしてるのか？」

「はい、とてもお元気ですよ」

男は微笑みながら答えるが、口は笑っていても目が笑っていない。

「……で、用件は？」

「証明して頂きたいんですね、彼らで……」

背後から見るからに手強そうな6人の猛者が姿を現した。翔は振り返り、予想外だったのか苦笑いしている。

「証明ねえ……（うげっ、全く気づかなかったー!!）」

「ご存知だとは思いますが、中継されておりますので……」

「いい加減その趣味やめたら……『重慶』聞こえてんだろ？」

「……では」

その声と同時に、襲い掛かってくる猛者達。瞬時に翔を取り囲み一斉攻撃を繰り出してきた。

「むっ……うお……ぐっ……ぐわあ」

予想以上の強さに完全に後手後手になっている。背後からの強烈な蹴りに、包囲網の外へふっ飛ばされた。倒れている翔を見下ろしながら不敵に笑う猛者達。

「痛っ、こんなにやろう!!」

「大丈夫ですか、そのままだと危険ですよ……」

その光景を穏やかに眺めている男は、含みのある言葉を投げかけた。翔は立ち上がりその男を見た。

「しょうがねえなあ、希望を叶えてやるよ。（【潜在：修羅】）う

おお……（我に眠りし修羅よ、今……目覚めよ）」

「修羅」 殺戮の悪魔。魔界の頂点に君臨する絶対的支配神。万物を滅亡へと導く。

悪魔の形相に黒いオーラが全身を覆っている。解き放たれる殺気に、猛者達は圧倒され後ずさりしている。

「……いくぞ」

——2分後。

無残な姿をした猛者達が地面に転がっていた。

「で、目的は？ ……って、もう居ねーし」

男に問いかけるが、いつの間にか姿を消していた。

「ふう……あーあ、返り血を浴びすぎたぜ」

服に付いた大量の血を見ている。ふと腕時計を見ると11時を回っていた。急いで昌也の店へと向かった。

第4話 噂 〱 騙りの翔 〱 (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第4話 噂く騙りの翔く

——練馬区：Bar Change——

翔は店の前に到着し、勢いよくドアを開けた。

……ガラン、鈴の音が強く鳴り響いた。

「ああー疲れた……昌也はいるかあー？」

大声で叫ぶ姿に、店内の視線が一斉に注がれた。常連客と従業員は唖然としている。血だらけ男が来店してきたのだから当たり前だ。そんな事は御構い無しに店内を見渡すと、カウンター越しに男に詰め寄られている昌也を発見した。

「……（昌也だと？）」

男は名前に反応したのか、静かに席に座り煙草に火を点けた。

「おおっ、こっちだこっち……（なんでコイツは血だらけなんだ？）」

カウンター内から声を掛ける昌也はあからさまに嫌な顔をしている。径子は無言のまま翔を見ていた。

「あんにやろ……帰って早々に襲ってきやがって、何なんだ……」

昌也に歩み寄りながら、ぶつくさと独り言を言っている。

「えっ、もしかして……【侠狼会】？」

「んっ？ 何で解ったんだ……」

「こちらさんが詳しく教えてくれるかもよ」

めつきり大人しくなった男に目を向けた。翔は何の事やら分からないまま、カウンターに座っている男に声を掛け顔を覗き込んだ。

「……誰だあ？」

「あー！！ お前こそ誰だ？」

「何だと！！……客らしいが、いいのか？」

いきなりの喧嘩腰に驚いている。そして、言い方が気に入らなかったのか苛々しながら昌也に尋ねた。

「【修羅】には絶対になるなよ！！」

「……（【修羅】！！）」

店の破壊を恐れた昌也は、目をギラつかせ念を押した。その言葉に反応したのか、男は驚愕した顔で目を見開いている。翔は再び覗き込んで睨みつけた瞬間だった。

「ちょ、ちよつと待ってくれ。もしかして本物……ですか？」

「本物だと！？」

眉をひそめ首を傾げている。

「あつはつはつはつはつ」

昌也は腹を抱えて大笑いしている。

「なあゝに笑ってんだよ？」

「すまんすまん、実際に会ったのは俺も初めてだよ……。お前が消息を絶つてから偽者があちらこちらで出没してるって……」

「偽者！？ 消息を絶つ！？」

「ああ、お前が旅に出た事は誰にも言っていないからな。4年ぐらいしてからだったかな、死亡説が流れたのは……」

径子は無言のままそつと昌也を見つめた。

「（どおりで……）おいおい、勝手に人を殺すなよ……」

苦笑いをしている。男は無言のまま二人のやり取りを聞いていた。

「お前、『仁』には話したのか？」

「お前だけに決まってるんだろ（何であいつに言わなきゃならんだ）」

「

「それじゃゝ偽者の出現もしようがないな」

「……そうなんですよ、昌也の兄貴！！」

「兄貴だぁとおゝ」

だんまりしていた男は意を決して話しに割り込んだ。

「大変申し訳御座いませんでした。私は三原台の修と言います」
申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「ほお、君が……で、修君は何で翔を騙ったのかな？」

「はい、あの……【皆殺】の伝説に憧れておりまして……。翔さんの死亡説を聞いてから、少しでも近づきたいと……」

真剣な眼差しで翔を見ている。昌也もまた、無言のまま翔を見ていた。

「……その話はどうでもいいが、今すぐ三原台に帰った方がいいぞ。お前が手を出したのは【侠狼会】が囲っているチンピラ達なんだよ」
「あつ、はい。こんな形だったとはいえ、お二人に出会えて嬉しかったです……」

修は報酬として受取った包みを残したまま、女を連れて店を飛び出して行った。

「お前を襲ってきたのは『重慶』の手の者だったのか？」

「うん……だが、三原台にはおそらく本隊が動いただろうな」

「三原台ねえ」

昔を想い出していた。

「おい！！ それより傍に居るその可愛い店員は誰なんだ？」

径子は可愛いと言われ驚いた表情をしている。

「おお、紹介が遅れたな。俺の彼女だ」

「なっ、何い……！！」

驚きのあまり目を見開いた。

「あの、初めまして径子です」

おしとやかに微笑みながら挨拶をした。

「よ、よろしく……（羨ましい）」

引き攣った表情で答えた。

「お前さあ、それより風呂貸してやるから入ってこいよ」
「……お、おお。さすがにこれじゃーお客来ないもんな」
家の鍵を受け取り店を後にした。

翔と修が居なくなった店内。常連客の慣れたいつもの空気が流れているが、どこかソワソワした雰囲気漂っていた。時刻も日をまたぎ、店内は少数の常連客が残っているだけだった。

昌也と径子はカウンター内で後片付けと明日の下準備を始めていた。

「まー君。翔さんって聞いてた噂と全然違うね」

「うーん、半分以上は当たってる気が……」

手を動かしながら苦笑いしている。

「でも、いい人そうだったよ」

「いい奴だよ。弱い立場の人には絶対に手を出さないし」

「え？ それって当たり前じゃ……」

呆れた顔で昌也を見た。

「あいつは当たり前って常識が無いんだよなあ」

「……噂の部分も本当にあるって事？」

昌也は頷きながら考えていた。

「上手く言えないんだけどさ、両足が不自由なんだろうな。杖を突かずに、なんとかその足で歩いている障害者の人って見た事ある？」

「うーん、両足を引きずるように歩いている人の事かな？」

「そうそう、俺達の中学にその障害を持った女の子がいてな……」

—— 15年前。

翔と昌也が、中学1年生の時である。

昼休み、裏庭にあるいつものたまり場に翔の姿が見えない。昌也

は教室に向かい話を聞くと、今日は欠席しているとの事だった。しようがなくなたまり場へ戻ろうと廊下を歩いていると、翔の姿を発見し駆け寄った。

「お前……また喧嘩したのか？」

「喧嘩じゃねえ、袋叩きにされた……体中が痛え」

翔は顔に数箇所青あざと鼻血を出していた。

「どうせあの公園に行ったんだろ……先輩達にも近寄るなって言われただろ？」

「うるせえなあ……頭に響く」

当時、翔達の地域にある小さな公園は隣町の中学校に占領されていた。その生徒はほとんどが不良であり、3割近い卒業生が組員の道を選ぶ最悪の学校だった。

「で、理由はなんだったんだ？」

「お前には関係ねえよ」

つれない返事をして、翔は立ち去って行った。

数日後、心配した昌也はこっそりと翔を尾行した。やはりあの公園へ向かっている。公園付近に到着し、ふと目を離れた隙に見失ってしまった。

「やばっ、あいつどこ行っただ？」

物陰からひっそりと公園を覗いてみると案の定、公園に面した道路に隣町の不良達が屯していた。

「6人か……今日は少ない方だな」

不良達を見ている視界の奥に障害者の女の子が姿を現し、こちらに向かって歩いている。

「まずいな、このままじゃ奴等の所を通るぞ」

不自由な両足で一生懸命に歩いている女の子は、不良達の前を通

り過ぎた。

「ふう……絡まれなくて良かったぜ」

何事も無かった事に安堵の表情を浮かべている。手には沢山の汗が握られていた。

その時だった、不良の一人が女の子の真似をして他の連中を笑わせ始めた。女の子は気にする様子も無く一生懸命に前へ前へと歩き続けている。不良達の終わらない馬鹿騒ぎと笑い声に、昌也は段々と苛立つてきていた。

女の子が昌也の隠れている場所に差し掛かった時だった、遠くによく見えなかったが襟元まで涙で濡れていた。声を押し殺し立ち止まる事無く歩き続け、悔し涙を流している。

昌也は物陰から飛び出して連中に向かって走り出した。

「調子に乗ってんじゃねーぞ!!」

翔の叫び声が聞こえ、どこから現れたのか不良達の輪の中で暴れている。昌也が到着すると真似をしていた一人が倒れていた。翔は躊躇する事無く男の両足を押し折る。悲痛の叫び声が、周囲の人の目をこちらに向けた。

「おい、どうした、面白いんだろ? 笑えよ……笑えっ!!」

押し折った足を更に踏みつけて大喝している。凄まじい迫力に圧倒され、他の連中は戦意を失い青ざめていた。

「おい、もうよせ。こいつらもこれで懲りるだろ」

優しく声を掛け帰ろうとした瞬間だった。次々と他の連中の両足を押し折っていく。

「……翔!!」

叫びも空しく、道路には蠢きながらのた打ち回っている連中がいた。

「……怖い」

青ざめた表情で昌也を見ていた。

「まあ、真似していた奴だけなら分かるが……全員はやりすぎだな」
何故か笑っていた。

第5話 連続殺人事件 〱痴漢〱（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第5話 連続殺人事件 〱痴漢〱

——港区：東京タワー——

東京を代表する名所として大勢の人々に愛され続けている東京タワー。洋子はエレベーターガールとしての誇りを胸に、日々働いていた。目当てのリピーターを持つ程、絶大な人気ぶりであった。

そんなある日の事、いつもの様に乗客の案内を終え、エレベーターに乗り込んだ。大勢の乗客で混雑したエレベーター内、第一展望台へと向かっている。間もなくして、背後から覆い隠すように迫ってくる大きな影がついた。

「……（触られている？）」

腰からお尻の辺りに手の感触がする。混雑による気のせいかと思いたかったが、徐々にその手はエスカレートしていく。異変を感じ抵抗を試みるが、隅に追いやられていて動けない。男に覆い隠された洋子の姿は、大勢の乗客からは見えなかった。

「はあ……はあ……」

耳元で荒い息遣いが聞こえる。気持ちの悪さに、洋子は下を向いた。無抵抗を確信したのか、男の手は内へ内へと進む。

「……んっ（ちよっ……と……）」

遮ろうと抵抗を始めた手など気にもせず、動き回る男の手。押し殺した洋子の声は、乗客達の賑やかな声にかき消された。

「お待たせ致……しました。第一展……望台へ到着……致しました」
執拗に攻め続けてくる指先に耐えながら、力の無い声を振り絞った。両足が小刻みに震えている。大勢の乗客に紛れ、何事も無かったかのように痴漢は姿を消した。

——数日後。

終電が姿を消した頃、薄暗く人通りの無い道を男は歩いていった。タクシー乗り場にも向かっているのだろう。ほろ酔い気分で歩いている男の前に、洋子の姿が見える。

「こんばんは。先日はどうも……」

「……（誰だ？）」

私服姿に気づかない様子だったが、思い出したのか目を見開き視線を逸らした。酔いも一瞬にして醒めた様子だ。

「女性の気持ちなんて解りませんよね？」

「……何の事かな？」

証拠がない事を盾にしらばくれている。しかし、疚しい気持ちからか洋子の目を見ることが出来ない。

「一緒に警察に行きましょう」

「な、何をさつきから自分勝手な事を……。人違いだよ人違い。それに、証拠でもあるのか？ 見せてみるよ！！」

逆ギレをして、その場から言い逃れようと必死になっている。そんな卑怯な男の姿を見ていた洋子の目の色が変わった。

「自ら裁きを下すしかないようですね……」

「な、何をするってんだ！！」

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。男は目を疑い、洋子の姿を目で追っていた。その瞬間だった、首が胴から離れ地面に転がった。

第6話 連続殺人事件 ～共通点～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第6話 連続殺人事件 〈共通点〉

——足立区：警察署——

国民の安全を守る。そんな正義に憧れて、司は警察官の道を選んだ。身近な人達に始まり、強いては国を守る。使命感にも似たその感情が彼を奮い立たせた。命がけで悪事を働く者達と向き合う日々。異例の速さで署長の座に昇進した彼も、今年で43歳を迎えていた。

司は、一人署長室で資料と睨み合っている。犯人の所在を突き止める任務を任されていたからだ。

「うーん……（『学』の所在をどうやって突き止めるのか……）」
ブツブツと言いながら考え込んでいると、ノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、ついに管轄内での被害者が出ました!!」

新たな事件の報告が舞い込んできた。今月に入り、区内各所で発生している連続殺人事件の報告だ。司は関連資料を受取った。

「これで4件目の発生となります」

「犯行の手口は全て一緒……」

「はい、正面から刃物で真つ二つです」

コーヒー片手に、しばらく考え込んでいた。

「……おそらく『一鉄』が引き起こした【大暴走】以来の重大事件ですよ」

興奮気味の部下を他所に、司は冷静に考えていた。

「他の3件に携わった関係者からの情報は？」

「奇怪な事だけで、どの現場も犯人の目星すらつ付けておりません。しかし、被害者の共通点はある程度確認されています」

「共通点？」

「はい、男性と東京タワー」

「……東京タワーだと？」

腕組みをして眉をひそめた。

「はい、被害に遭う数日前に全員が東京タワーに立ち寄っています」

「防犯カメラに映っていた……か」

再び資料に目を通し考え込んでいる。

「現場には血痕が全く見当たりませんし、奇妙すぎます。巷では、呪いだの祟りだのとなぜか苦茶な状態です」

「わかった、ご苦勞様。捜査を続けてくれ……（今回も相談するしかないか）」

部下の退室を見届け、司は携帯を手を取った。

第7話 連続殺人事件 ～ニュース～（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第7話 連続殺人事件 ～ニュース～

——練馬区：Bar Change——

昼下がり、偶然にも翔はBar Changeの前を通りかかっていた。シャッターが開いているので勝手に中へ入ると、準備に追われている昌也と径子を見つけた。

「あれ、何で店にいの？ デートじゃなかったのか？」

「お前、ニュース見てないの……」

忙しい手を止め、呆れた顔で見ている。

「……俺がそんなもの見ねー事ぐらい知ってんだろ」

口を尖らせ息巻いている。

「連続殺人事件の被害者が全員立ち寄ってるんだとよ」

「……で？」

「径子が怖いからやめようって」

「まー君、ごめんね……」

「気にするな。嫌なのに行っても楽しくないしな」

シユンとした表情の径子を昌也は慰めていた。

「ふん」

よく理解出来ていない様子である。

——江戸川区：某所——

12歳にして学者顔負けの知識と知恵、千里眼を潜ませる少年・涼。戦略的な書物を読み漁り、戦術や罠の実践改良などもこなす、ちよつと危ない小学生。しかし、まだ甘いものが好きだった。

昼下がり、リビングの食卓でチョコレートを食べている。母親はソファに座りテレビを見ていた。ついている番組はもちろんワイドショーだ。

「ニュースをお伝えします。昨夜未明、連続殺人事件の被害者と思われる……」

「物騒な世の中ねえ」

「警視庁の発表によりますと、犯行の手口などから同一人物との……」

「……（そろそろかな）」

「東京タワーで、何らかのトラブルが原因と……」

「残念だったねー、せつかくの遠足だったのに……」

「しょうがないよ、それに僕だけじゃないしね」

……ジリリリリ……ジリリリリ。

——電話が鳴っている。思い腰を上げ、母親は電話に出た。

「はい……あら、どーもいつもお世話になっております。お待ち下さい……」

涼を見て手招きしている。

「こんにちは。……はい、わかりました」

電話を切るや否や、リュックサックを取り出し準備を始めた。

「もしかして、今回の事件？」

「うん、そうみたい」

「気をつけるんだよ」

「はい」

母の抱擁を受け涼は出発した。

第8話 連続殺人事件 く推理く（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第8話 連続殺人事件 〱推理〱

——足立区：警察署——

警察署に入るや否や、涼は署長室へと案内された。ここを訪問するのはもう何回目になるだろうか。ほぼ顔パス状態である。

「おっ、涼君わざわざすまないね」

司は首を長くして待っていたのか、涼の顔を見るなり喜んで、涼は簡単に挨拶を済ませ、案内されたソファーに腰掛けた。

「すでに知っているとは思うけど、これを見てくれ……」

涼は手渡された資料に目を通して、その姿を見ている司は、毎度思うところがある。目では資料を見ているが、実際のところその奥に潜む遠くを見ている感じがしていた。

「（【潜在：アテナー】）……不思議な事件ですね」

〱アテナー〱ギリシア神話に登場する戦争の知略を司る都市の守護神。知恵・工芸・学芸の神でもある。

「そつなんだよ。正直お手上げだ……」

司は飲み物の手配をして、頭を抱えている。

「……人の仕業ではないかもしれせんよ。不思議な力を持っている者達がいることは……」

「ああ、理解しているつもりだ」

「その線で事件を紐解くと辻褄が合ってきます」

「んっ、もう犯人を確信している言い方だね」

何とも言えない表情で答えた。

「はい、ある程度までは……」

「聞かせてもらえるかな？」

涼は差し出された飲み物を頂き、一息ついてから話し始めた。

「まず、正面からの切断なのに全員が無防備という点です。普通、正面から刃物が迫ってきたら反射的に先に手が出るはずだと思います。」

「……物凄い速さで突進してきたと考えたら？」

「どんなに速くても人の速度なら顎を引くなり身を縮込ませる方が速いと思います。なのに全員の首が無防備な状態になっていた……」
司は話を聞きながら、顎を引く素振などをして被害者状況の確認をしている。

「……上を向いていた？」

「はい、おそらく何かを見上げていたんだと思います」

「うん。しかし、犯人が上に何かを投げて見上げた瞬間につて事も……」

「はい、それは否定できませんが、問題は血です」

「血痕どころか血の一滴も現場には無かった……」

司に限らず、事件を担当した同僚達が一番頭を抱えた部分であった。

「血を一滴も流させずに相手を斬る……」

「……【妖怪：鎌鼬】？……つてまさか」

「はい、私はそうだと思います」

「……」

「それを操っている人が……」

「んー、確かに辻褄は合うが……動機は？」

司は話を遮り、納得のいかない表情を浮かべている。

「本人に聞くしかないですね。この人達から事情聴取して下さい」
「……エレベーターガール？」

涼の指差す資料の場所を見て、司の脳は錯乱した。その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、お電話が……」

警視庁のお偉いさんからとの事で、二人は話を止め涼は帰宅した。

——その夜。

司は呼び出された銀座高級クラブ・リジュームにいた。お偉いさんをホステス達が囲い、隣には絶世の美女と言われているクラブのNo.1が接待している。

「今回の事件だが、君に一任されたと聞いているが……」

「はい。管轄内で被害者が出ましたので……」

「あの大事件の主犯を捕らえた君だ。大いに期待しているぞ!!」

「……ありがとうございます」

「どうぞ……」

No.1から差し出されたお酒を受け取り、一気に飲み干した。

——数日後。

任意の事情聴取が行われ、数名のエレベーターガールが警察署を訪れていた。部下に案内された一同は応接室に通され、椅子に腰掛けた。

「皆さん、大変お忙しい所、ご協力頂きありがとうございます。今月に入ってから何か身の回りで変わったことなどはありましたか？」

司の質問に多少ざわつきながら答える一同。

「私は特に……何もなかったと思います」

「はい、私も」

「あの……痴漢に遭いました」

勇気を振り絞り一人が答えた。

「失礼ですが、犯人の顔などは……」

「仕事柄、振り向く事ありませんので……」

「そうですか……」

「あの、痴漢って立派な犯罪ですよね？」

突然、横から食って掛かるような口調で質問された。

「はい、もちろんです」

「もう少し警察の方々もそつちを厳しく……」

不満気な表情をしている。

「そつだよね。いい迷惑だわ」

同調する彼女達。警察に対する不満が部屋に充滿していた。司は取締る立場から申し訳ない表情を浮かべていた。

「それでは皆さん、貴重なお時間を頂き、ありがとうございました」
司はお礼を述べ、急ぎ足でモニタールームへと移動した。モニタールームでは涼が一部始終を視聴していた。

「涼君、どうだった？」

「判りました…… 4人目の女性です」

「理由は？」

「本人が教えてくれますよ……」

涼は何か考えがありそうな表情を浮かべていた。

第9話 連続殺人事件 〱実証〱（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第9話 連続殺人事件 〱実証〱

——江戸川区：某所——

夕暮れ時、帰宅途中の涼は人通りのない道を歩いていた。しばらく歩いていると、背後から近づいて来る足音に振り向いた。

「ボーヤ……凄いいじゃない、まだ小学生なんですって……」。帰りに渡された紙を見て驚いたわよ」

足音の正体は洋子だった。不敵な笑みを浮かべている。

「ごめんなさい……殺さないで下さい」

全身を震わせ、命乞いをしている。

「ごめんね……怨まないでよ（【操術：鎌鼬】）」

〱鎌鼬〱 鎌のような両手の爪を持つ妖怪。三位一体の姿で現れ、一匹目が人を倒し、二匹目が刃物で切り、三匹目が薬をつけていくため出血・痛みがない。

洋子はゆつくりと宙へ舞い上がっていく。それを見た涼は瞬時にしゃがみ込んだ。頭上を凄まじい風が通り抜けていくのを感じた。

「……」

洋子は目を見開き驚いた表情を浮かべている。

「やはり操っていたでしょ？」

誰かに話しかけている。すると物陰に隠れていた司が姿を現した。「ふう、心臓が止まるかと思ったぞ。自ら囿になるなんて言うから

……」

何事も無かったことに安堵の表情を浮かべている。

「……嵌めたわね!!」

洋子は怒り心頭の表情で見下ろしている二人を睨んだ。

「奇怪すぎて、実証するしかなかったんですよ」

「ばつちり撮れてるぜ……おとなしく自首するか？」
司は手に持っているビデオカメラを見せた。

「あんまり図に乗らないでよね……」

突如、妖怪：鎌鼬が洋子を囲むようにして姿を現わした。

「げっ、3体もいるぞ……！」

「違いますよ、三位一体なんです」

「……」

「屍が一つ増えるだけ……何も変わらないわ……！」

叫び声と同時に上空から鎌鼬が襲い掛かってくる。

「涼君、ちよつと離れていなさい」

涼を遠ざけ、立ち向かう司に鎌鼬が襲い掛かる。

「うわっ……おっ……」

三位一体の鋭い斬撃をかるうじて避けている。

「ふふ、死になさい……」

空中から見下ろしながら笑っている。

「いつまでもやられっぱなしだと思ふなよ……」

右手を拳銃のようにして構え、狙いを定めた。

「（【体技：空砲】）喰らえ……！」

浮遊している洋子に空気の銃弾が向かって行く。だが、撃ち込んだ銃弾のほとんどを鎌鼬に弾かれた。

「……（他にも誰がいる！？）」

涼は何かの気配を感じ、辺りを見回している。

「……あつらあ」

司はほとんどの銃弾を弾かれ参った表情を浮かべている。

「あんたも変な力を持っているようなね？」

「俺達だけじゃないと思うがな……」

睨み合いながら対峙している二人。

「司さん、他にも誰かいます!!」

叫び声と共に気配が消えた。

「えっ!!? 何だって?」

涼を振り返った。一瞬の隙を突き、洋子は飛び去ろうとしている。

「あっ!! 逃がすか……」

口では言って見たものの、為す術もなくあっさりと取り逃がしてしまった。

「取り逃がしちゃいましたね……」

涼は苦笑いしている。

「……面目ない(だって俺は飛べないもの)」

口を開けたまま肩を落としていた。

「……(あの気配は一体何だったんだろう?)」

翌日、司は事件の決定的証拠として犯行手口を撮影した映像を提出したが、世間的・科学的に理解されず、洋子の指名手配は証拠不十分で終わった。

第10話 謎ゝ音郷道場ゝ（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第10話 謎ゝ音郷道場ゝ

——文京区：音郷道場——

全国にその名を轟かす空手の名門・音郷道場。

門下生の熱く激しい稽古が続いている。学校から帰宅した香織は、さっそく道着に着替えて姿を現した。2代目師範の娘としてだけでなく、門下生の憧れの的だった。準備運動をしている香織に初代師範が近づいている。

「きゃ！！ もうっ、お爺ちゃんったら……胸を触らないでよね！！」

「ひえっひえっひえっ。脇がまだまだ甘いんじゃないやよ……お尻は気づかんかったのか？」

両胸を包み込むように押さえている香織に、爺はニタついた顔で逃げるように奥の部屋へと消えて行った。毎度の事ながら、そんな刺激的な光景を目の当たりにした門下生は、稽古に集中できずにざわついている。

「やはり老師は只者じゃないぞ！！」

「そりやそうだろ。なんてったって……」

「大抵の奴なら、胸に届く前に指か手首を折られているはず……」

「ああ、いくら香織ちゃんが油断しているとはいえ……って、そっちかよ！！」

「こらっ！！ 無駄口を叩いてないで、稽古に集中しろ！！」

2代目師範は門下生に活を入れた。再び稽古に熱が入る。その姿に満足している師範は、ふくれっ面の香織の元へ歩み寄った。

「まったくもお爺ちゃんったら、皆の前で……」

「香織、『誠』君は休みか？」

「うん、テスト期間中なんだって……」

「そうか、大学生も大変だな……」

「あつ、そうだお父さん。この前『涼』君がね……」

「（小さな声で）こらこら、ここでは師範と呼びなさい」
「はい」

「ん？ 香織のテストはいつからだ？」

「高校生は来月からよ」

「そうかあ……来月……うーん」

師範は指導そっちの気で、何やら一人でブツブツ言いながら考え込んでいる。

「こらっ！！ 娘に構ってないで、指導に集中しろ！！」

香織は師範に活を入れた。

第11話 謎 〜未確認生物〜（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第11話 謎 ～未確認生物～

——文京区：東京大学——

夏休みに入り、香織は誠の運転で一泊二日の旅行先へと向かって
いた。晴れ晴れとした空の下、レンタカーは東京大学付近の大通り
を走行している。

「教授、あの未確認生物はこの辺に逃げて来たと思うんですが？」

「ふむ、まだ遠くへは行っていないはずだ。手分けして探そう……」
なにやら生物学部の教授と生徒達が校舎周辺を搜索している。

「あいつらいつも追いかけてくるな。麻酔銃なんてアブねーもん持
ってるし、ここは逃げるしかない……」

その未確認生物は逃走中であつた。物陰に身を潜ませ、大通りを
渡るタイミングを計っていた。

「いたぞ！！ こつちだ！！」

生徒の叫び声が近くで聞こえた。慌てた未確認生物は大通りへ飛
び出して行つた。

その頃、香織と誠は宿泊先のイベント話で盛り上がっていた。

「他県からわざわざ見に来る程、花火が有名らしくてさ……」

誠はチラチラ香織を見ながら運転している。笑顔で話を聞きなが
ら前を見た香織は、何かが横断しているのが目に入った。

「ちょ、ちょっとまこつちゃん！！ 前見て前！！」

誠が前方を見ると、そこには獣か人か見分けがつかない何かがい
た。とつさにブレーキを踏んだ。周囲にブレーキ音が鳴り響く。跳
ねた感覚は無かった。どうやらその何かは轢かれずに逃げていつた
ようだ。安堵の表情を浮かべている二人。

「何だったの？ 熊っぽく見えただけ……」

「危なかった、轢かなくて良かった」

「もう、ちゃんと前見て運転してよね!!」

「ごめん。これからは気をつけるよ」

気を取り直し、二人は旅行先へと車を走らせた。

現場を目撃していた生徒達は啞然としていた。数名は腰を抜き、青ざめている。

「……教授、あの生き物……もの凄い動きをしましたね」

「まさに珍獣だ……捕獲したら生物学界を揺るがす発見になるかもしれない!!」

教授の目の輝きとは裏腹に、生徒達は未確認生物への恐怖に襲われていた。

第12話 謎ゝ吾駒運送ゝ（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第12話 謎ゝ吾駒運送ゝ

——石橋山古戦場——

頼朝拳兵の地として知られている石橋山古戦場。高速を降りた車は海岸沿いを走行していた。晴れ渡る空、目の前には広大な海が広がっている。

「わぁー……綺麗な海」

「まだ1時間近くかかるな。ちよつと休憩する？」

「そうだね。海を見たいわ」

車を近くの路肩に停め、二人は心地よい潮風に吹かれ景色を眺めていた。打ちつける波の音が心を癒していく。

「……今回の旅行だけど。師範は怒ってなかった？」

「ううん、むしろ喜んでたよ。お爺ちゃんは寂しそうだったけど……」

誠はその言葉に若干の笑みを浮かべてるが、少なからず抵抗を感じていた。いくら親公認の恋人同士とはいえ、香織はまだ高校生である。

「私はね……まこっちゃんとうろしていらるだけで幸せ」

誠を見つめ、恥ずかしそうに照れた表情を浮かべている。誠は微笑みながら優しく抱き寄せた。二人の顔がゆっくりと近づいていく。

「お母さーん！！ お父さーん！！」

遮るように、少女の叫び声が遠くから聞こえた。二人は声のする方へ駆け出し山間の道を曲がると、そこには地元の人達と思われる人だかりが出来ていた。

「まこっちゃん、上見て！！」

香織が指差した崖の上から事故車両が顔を出している。今にも落下しそうだ。姿こそ見えないが、その車両から少女の叫び声が聞こ

える。

「すいません。崖の上に行く道はどこにありますか？」

見渡す限りそれと思われる道がなく、誠は地元の人に尋ねた。

「あそこに行くには、ずっと先の道を迂回するしかねえよ」

「それじゃー間に合わない……」

誠は登れそうな場所を見つけて、急いで崖を登り始めた。

「あーどうしよう。何もしてあげられない……」

香織は落ち着かない様子で事故車両を見上げている。その間にも、ジリジリと車両は傾き始めていた。

誠はなんとか崖の上に到達し事故車両へ走り出した。しかし、まだ距離は100m以上だ。全力で走る誠の視界に、対向車線から1台のトラックが現場近くで停車するのが見えた。

「まこっちゃん、急いで!!」

崖を登りきった姿を見届けた香織は、大声で叫んだ。事故車両は限界を超え、ゆっくりと落下し始める。

「くっ……（間に合わない!!）」

走る誠の耳に、崖下から大勢の悲鳴が聞こえた。

「きゃあ!! ……えっ？」

崖下にいる香織達からは、落下した事故車両が宙に浮いている様に見えていた。ざわつき騒ぎ始める人ばかり。

現場に到着した誠は目を疑った。トラックの運転手が、右腕一本で車両のテール部分を掴んでいる。そして、ゆっくりと引き上げ始めた。誠はその姿を見て、無言のまま立ち尽くしている。引き上げた車のドアを開け、少女を抱きかかえた。

「もう大丈夫だ。怖かったな……」

「……お父さん、お母さんは？」

全身を震わせている少女は声を振り絞った。落ち着かせた少女を誠に預け、車両に向かって歩き出した。中を覗き込み両親の様子を窺っている。再び誠の前へと歩み寄った。

「気を失っているが、大丈夫だよ」

「ありがとう……」

精一杯の声でお礼を言った少女は、誠の腕に抱かれたまま大声で泣き出した。

「後は頼んだぞ、青年……」

誠に後事を託し、トラックへと歩き出した。

「すみません……あの、お名前は？」

誠の問いに振り向きもせず無言のままトラックへ乗り込んでしまった。走り去るトラックに書かれている会社名を見ていた。

「……（吾駒運送？）」

「まこつちゃん、大丈夫？」

香織が崖下から呼んでいる。報告がてら顔を出しに行こうとした時だった。目の前に両親が現れ、誠は抱きかかえていた少女をおろした。意識が回復したようだ。特に二人には外傷は見られなかった。

「この度は、本当にありがとうございました」

「あつ、いえ、あのですね……」

誠は目の前で起きた衝撃的な事実をありのまま伝えた。両親はにわかに信じられない表情を浮かべている。少女は母親の腰に抱きつきながら口を開いた。

「そつだよお父さん。大きなおじさんが助けてくれたんだよ」

父親は娘の顔を見ている。再び崖下から香織の声が聞こえた。

「まこつちゃんってばっ……」

誠は思い出したかのように走り出し崖下を覗いた。香織達に無事を伝え、再び両親の元へ向かった。そして、トラックに書かれていた吾駒運送の事を知らせると、父親は連絡してみると告げ、頭を下げてお礼を言った。

誠は親子に挨拶を済ませ、崖を下りた。香織を呼び寄せ車へ向かって歩き出す。しばらくすると、パトカーと救急車のサイレンが聞こえてきた。

二人は車に乗り込み旅行先へ向かう。

「あの家族、無事で本当によかったね。でもさあ……あの時、何があつたの？ とても不自然だった……」

どこか浮かばない表情で運転をしている誠は、見たまを話した。
「えー嘘！！ 私達からはトラックもおじさんも見えなかったよ……気になるの？」

「（あつ！！）……ごめん。二人の時間を大切にしよう」

横顔からでも分かる優しい笑顔に、香織は嬉しそうにキスをした。

後日、誠は様々な方法で吾駒運送を探したが、存在していなかった。

第13話 五虎将 〓 出会い 〓 (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第13話 五虎将 へ出会いへ

——北区：華艶——

翔は昌也の所用に付き合い北区を訪れていた。用件を済ませた二人は122号線沿いを歩いている。太陽は真上に顔を出していた。

「おい、あいつの話長すぎだぞ……」

「悪い悪い、あーゆー人なんだよ」

Bar Changeの開業を手助けしてくれた恩人に会いに行っていたようだ。

「ああーそれより腹減った。ここはどこだ？」

「北区だなこの辺は……じゃー適当に入るか」

大通り沿いに見えた小さな中華料理店へ、二人は向かった。

「いらつしやいませー!!」

翔は暖簾を潜って立ち尽くしている。店内を忙しそうに走り回る中国人女性に目を奪われていたからだ。

「おい……何してんだよ。早く行けって」

昌也にせっつかれ、空いているカウンター席に二人は腰掛けた。注文を終えて間もなく、昌也は翔の変化に気がついた。

「お前、もしかして……」

「……な、何だよ」

横目で翔を見る昌也。翔は何も言われていないのに顔を赤らめていた。

「……（分かりやすいなコイツ）」

「こ、この店のお名前……何だったわけ？」

目が泳いでいる。翔は白白しく話題を変えようとしていた。「読めないけど、暖簾には華艶って書いてあったぞ」

「……そ、そうだよな。書いてあったあった」

「……（コイツまた来る気だな）」

そんな会話をしていると、厨房の奥から声が聞こえた。

「凜、運んでくれ……」

「――！（あの子、凜ってゆー名前かあ）」

「……（決まりだな）」

翔は凜をじっと見つめ、落ち着かない様子だ。間もなくして、二人の注文が運ばれてきた。

「おまちどうさま」

「……に、二ーハオ――！」

翔はとりあえず笑顔で話しかけた。

「何言つてんだ？ 見すぎだ、お前見すぎ……」

凜は笑顔を残し、また厨房へ戻っていった。

「まーさーやー。どうしたらいい、どうしたらいいんだ？」

「お、おい、落ち着け。腹が減っては……だ、とりあえず食うぞ――！」

ゆっくりと食べ始める昌也、隣からガチャガチャと音がうるさい。翔が勢いだけで食べている。食事を終えた二人は、一息ついた。

「まあ、言いたいことは分かるが、とりあえず今日の所は様子を見よう」

「……（さっきの笑顔可愛かったなあ）」

「聞いてんのか。じっくりゆっくり時間をかけてだな、徐々に慣れよう」

「わ、わかった」

「……（もうあれから何年経つんだ……複雑だな）」

昌也は遠くを眺めながら物思いにふけていた。翔はソワソワしながら凜を見続けている。

「出前に行つてきまーす――！」

ふと店内を見渡すと数名の客しか残っていなかった。

「……（ああ、いつてらっしゃーい）
もう凜しか映っていなかった。」

第14話 五虎将 〱約束〱（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第14話 五虎将 〱約束〱

——文京区：音郷道場——

凜は音郷道場へ到着した。バイクを止め、インターフォンを押す。
「こんにちわー、華艶です」

「はい。今行きまーす」

インターフォンから香織が答えた。道場の奥からバタバタと足音が近づいて来る。

「凜さん、こんにちは。遠いのにもいつもごめんね」

「大丈夫だよ。いつもありがとう」

月に数回だが、出前をしている内に自然と二人は仲良くなっていた。

「みんな大好きなんだよね。華艶の炒飯」

「ありがとう。老師は元気ですか？」

初めての出前で訪れた時に、凜は爺に胸を触られた過去があった。

「うん。今日は留守だけど。……あつ、そうだ」

今度の休みの日にでも、渋谷へ買い物に行こうと誘っている。

「うん。連絡ちょうだい」

凜は、香織に笑顔で手を振り道場を後にした。

第15話 五虎将 友情 (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第15話 五虎将 〱友情〱

——北区：華艶——

その頃、翔は昌也から興味の無い話を聞かされていた。

「だ・か・ら……その【五虎将】ってなんだよ？ ……（凜ちゃん早く戻ってこないかなあ）」

「あー、お前長いこと居なかったもんな……」

翔は入口を見つめ、昌也の話を上の空で聞いている。

「いつごろだったかな、東京で最強は誰だ……みたいな話が出始めてさ……」

「なんだそれ……どーでもいいわ（次はいつ来ようかな……）」

突然、翔の目が輝いた。

「ただいまー！！」

「！！（あつ、おかえりー）」

凜が出前から帰って来たようだ。獣のように凜の姿を目で追っている。

「おい……で、墨田区の『一鉄』しかいないだろって始まって……」
翔は昌也に後頭部を見せている。

「23区を制覇した男だ。知ってるだろ？ 後にも先にもこの偉業を成し遂げた者はいない」

「18年も前の話だろ。……実在するのかね？ ……（凜ちゃん可愛いなあー）」

「……いるだろ、バカー！！」

「次は？ （俺だろ）」

「新宿区の“孤高の剣豪”『麗』。歌舞伎町No.1ホストだ」

「知らん……（凜ちゃんこっち向いてくれないかなあ）」
「裏の世界じゃー知らない奴はいないってよ」

翔：「次？（そろそろ俺か）」

「ご存知『直人』！！ あいつ今“傭兵”って呼ばれてんだぜ」

「何っ！！ あいつ……（直人がランクインしてるなら次こそ俺だろ）」

「そして……中野区の『誠』」

「……ぐえっ（俺じゃないのかよ）」

「んっ、どうした……すげー良い奴らしいんだが……」
「が？」

「一度戦闘になると全てに対応してくる天才なんだとよ」

「……（あつ凜ちゃん笑ってる）」

「おそらく現時点では最強じゃねーかって……」

「（はっ、そうだ俺は死亡説が流れてたんだっけ）……ブツブツ。
（だから候補にならないのか。そーだ、そーに違いない）……ブツ
ブツ」

「何ブツブツ言ってたよ。最後の一人は……」

「もついいや、興味ねえー（凜ちゃん見ていたいし）」

「はっ？」

「どーせつまんない奴だろ」

「……ある意味当たってる。……お前だ」

「だろー【五虎将】なんてつまんない奴ばっか……って、ええ！？」

「俺はいつでもお前が最強だと信じている」

「お、おお……兄弟よ。死ぬときは一緒だよな？」

「……嫌、それは遠慮しとく」

「うおおい！！ この涙どうしてくれるんじやい」

「おい、その兄ちゃんうるせーぞ!!」

翔の騒ぎ声を他の客が叱りつけた。

「何だと?」

「アイヤー、喧嘩はやめて!!」

「御意っ!!」

「うるっさい……武士かお前は……（大田区あの男はまあいいか）」

「

第16話 治安部隊ヒーロー 杉並区の英雄（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第16話 治安部隊ヒーロー 杉並区の英雄

——練馬区：Bar Change——

翔はカウンター越しに昌也と会話をしていた。

「お前、戻ってからしばらく経つけど『仁』には連絡したのか？」

「なんでイチイチ連絡するんだよ」

「お前が居ない間、結構大変だったらしいぞ」

「なんだそれ？」

「杉並区的安全神話が崩れそうになったんだとよ」

「それって勝手にあいつが言ってるだけだろ？」

「そうでもないらしいぞ。実際、犯罪件数最小の区になったみたいだし」

「ほーそれは3本槍の功績なのか？」

「どうだろうなあ。今じゃ13番まで部隊があるらしいし」

3本槍とは、仁が代表を務める治安部隊組織の旗揚げ時より付き従う1・2・3番隊の隊長達の事である。

「……でも、警察には煙たがられてんだろ？」

「あいつら戦闘までこなすからな……でも、区民の人気は絶大らしいぜ」

「それで増えたのか……しょうがねえなあ、今度顔でも見に行くか……」

第17話 治安部隊ヒーロー 無双 (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第17話 治安部隊ヒート 〱無双〱

――杉並区：善福寺公園――

――数年前に遡る。

治安部隊ヒートの事務所に、2番隊隊長の溝口が駆け込んできた。

「仁、吉祥寺の奴ら久々に善福寺公園を狙ってきたぞ!!」

「最近やつとおとなしくなったと思っていたのにな……」

「ああ、とりあえず3・7・8番隊を向かわせている」

「わかった」

吉祥寺の連中が度々、杉並区の領土を狙っていた。特にこれと言った人物はなく、数任せの相手にそれほど警戒をしていなかった。

いつものように、鎮庄の報告を待っていると、9番隊隊長の三浦が駆け込んできた。

「仁さん、大変です!! 3部隊が壊滅状態との連絡が……」

「何だと!? 仁、全部隊に召集をかけるか?」

「まだだ、他の地区の情勢も気になる。……とりあえず向かうぞ」

仁達は急ぎ現場に向かった。

しばらくして、仁の友人である信人が事務所を訪れた。

「仁は居るかぁー?」

「あつ、信さんこんにちは……」

事務所に待機している10番隊隊長の岡本。信人は事務所の雰囲気がいいつもと違うことに気がついた。

「誰も居ないな……何かあったのか?」

「いえいえ、特に何もありませんよ」

「……そうか。たまには顔出しに来てって伝えてくれ」

「あ、はい、わかりました」

信人は不服そうに事務所を後にした。

その頃、仁達は最前線の本陣に到着していた。真つ先に溝口が状況を聞く。

「吉祥寺の蔵野達の仕業なのか？」

「はい。総勢150名程です。3番隊隊長：今川さん、8番隊隊長：清水は病院へ運ばれました」

答えているのは、7番隊隊長の小木である。

「いつもの3倍近いじゃねーか」

「仁さん……申し訳ありません」

「気にするな。詳しく教えてくれ」

落ち着いた表情で仁は問いかけた。

「いつになく、蔵野の奴が正面から強気で攻めてきました」

「数まかせの総力戦ですかね？」

三浦が口を挟んだ。

「最初は今川さんの活躍で驚くほど互角に戦えたんですが……」

「……どうした？」

「一人の男が現れてから状況が一変しました」

小木は、少し青ざめた顔をしている。溝口が問う。

「その男は誰だ？」

「私には分かりませんでした。が今川さんが逃げろって……」

「至急、そいつを調べてくれ」

仁は三浦に指示を出した。

「……あいつは強すぎます」

下を向き、恐怖に怯える小木。

「……各部隊長には持ち場の治安を維持しろと伝える」

「遠征に出して修行させている弘道はどうすんだ？」

「あいつは俺の後継者だ。そのまま修行させておけ」

仁と溝口が話している。そこへ、三浦が血相を変え戻って来た。

「大変です！！ 男の正体が解りました…… “傭兵” 『直人』です！！」

「ぶー、【五虎将】じゃねーか！！」

「ああ、【無双】の使い手だ……」

慌てふためいている溝口とは対照的に、仁は落ち着いていた。すると今度は、小木が駆け寄ってきた。

「た、大変です！！ 弘道が遊撃隊になって背後から攻めますって……」

「誰が連絡したんだ？」

「弘道から事務所に連絡があって……岡本の奴、しゃべっちゃったみたいです」

「危険ですよ！！ 弘道は『直人』がいることを知らない……」

「連絡はつかないのか？」

「何度連絡しても繋がらないんです」

「『直人』と150に対して、こっちは遊撃隊の弘道を含めて40弱。……どうすんだ、仁？」

ずっと無言で聞いていた仁は、口を開いた。

「次の衝突の際は……俺が『直人』と戦う」

「何？」

「聞いた噂だが、1回の戦闘が100万らしい。おそらく蔵野達じや1200万を集めるのが精一杯だろう」

一同がその話に沈黙している。三浦が口を開いた。

「次の戦闘で資金が尽きるって事ですか？」

「おいおい、そんな噂信じるのか……」

「『直人』さえいなければ何とかなるだろ？」

「馬鹿言つな俺が行く。簡単に大将を出せるかよ！！」

「俺がいきますよ！！」

「……立ち向かっていけるか自身がありません」

「無理はしなくていい。【五虎将】の戦闘を目の当たりにしたんだ

……」

怖がる小木に優しく微笑んだ。

「お前も十分体験してるだろ？」

無言の溝口に、仁は語り掛けた。

「絶対的不利な状況だ、作戦を練るぞ！！」

——善福寺公園入口。日が沈み、辺りは暗闇に包まれていた。

見張りの前に信人が姿を現した。

「うつひやつひゃ。……うつゝ」

「な、なんだこの酔っ払いは……おい、おっさん。ここで何をして
いる？」

「池で魚でも釣ろうかと思ってねえ」

「もう夜だ。それに状況が見えないのか……今ここは戦闘地区なん
だよ」

「えっ！！ 魚が寝てるって……」

「言ってねえよそんなこと……怪しすぎるぞコイツは。とりあえず
連れて行くか？」

「ちっ、しょうがねーな」

見張りの数名が面倒臭そうに信人を連行していった。その頃、敵
陣の背後に到着した弘道と補佐役の佐助。

「どうにか間に合ったみたいだな」

「ああ。妙に静かだぜ」

「これからどうする？」

「とりあえず、仁さん達の動きを見極めないとな」

「それにしても数が多くないか？」

「いつもの倍以上はいるな……」

本隊の動きを見極めようと、13番隊の10名が敵陣の背後で息
を潜める。

連行された信人は敵の本陣へ到着していた。

「失礼します。入口に変な奴がいましたので連れてきました」

「んーなんだ？」

蔵野は入口を振り返った。

「ういゝひいつく。……ご苦労様」

豪腕をうならせ見張りの数名を吹っ飛ばした。

「敵だ！！ 集まれ！！」

蔵野の叫び声に、すぐさま20名程の兵隊が集まった。

「敵本陣に一人で来るとは……いい根性してるな」

「友の危機なんぞな。……暴れさせてもらうぞ」

豪腕のうなりに敵兵は次々と倒されていく。

「何者だ、貴様？」

「ただの酔っ払いだよ。……覚悟しな」

「うわあ！！ ……直人さん、直人さん」

歩み寄る信人に恐れをなした蔵野は、直人の名を叫びながら本陣の奥に逃げ込んだ。

「……苦戦してる理由ってそーゆー事か」

信人は歩みを止め、顔が引き攣っている。まもなくして、奥の部屋から直人と蔵野が何やら話をしながら姿を現した。

「この戦闘で終わりだが……いいんだな？」

「ああ構わねえ。（また『清』さんに連絡すればいいさ）」

直人は信人を見た。

「じゃあ……始めようか？」

「待て、ここじゃ狭い。外で存分に楽しもうじゃねえか」

「……お好きなように」

信人は外に出るなり、すぐさま大木を引き抜き手を加え六角棒を作った。

「うわっ、なんだこいつは！！」

それを見ていた兵隊が驚いている。信人は片手に携えた六角棒を直人に向けた。

「なにか不服でも？」

「……問題ない」

「そんじゃー遠慮なくいくぞー！」

大木並の六角棒を小枝を振るうようにブンブンと振りまわす。直人は軽々しくそれをかわしている。

「ちっ、全然あたんねー……年は取りたくねーな」

攻撃し続けるが、疲れの色が出始めていた。

「終わりか？　じゃあ、こっちも遠慮なくいくぜ（【呪縛：無双】）」

「

　無双　古の武将達の呪いにより、あらゆる武器を使いこなす。突如、直人の手に長槍が現れた。

「【無双】の力か……（やばい、俺も変身を……）」

「無双・螺旋突ー！」

閃光の一突きが信人を貫いた。

「……ぐはっ（ちっ、間に合わなかったか）」

膝から崩れ落ちた。

「決まりだな」

蔵野は不敵に笑っている。

「仁さん、敵陣が慌しい動きをしています」

「……」

「弘道達じゃねーだろうな……」

「突っ込みますか？」

「……暗くて判らないがもう少し様子を見よう」

「うおっ、なんだ今の稲妻みたいな青光りは？」

「……全員突撃ー！」

「よっしゃーいくぞーー！」

身を潜めていた弘道と佐助。

「動いた!!」

「……総攻撃か？ 俺達も突撃だ!!」

本陣の動きに呼応するように、背後から急襲する。

本陣に戻っていた蔵野の元へ報告が入った。

「大変です!! 敵の総攻撃が始まりました」

「何が大変なんだ。3倍近い兵隊がいるんだぞ……潰せ!!」

「帰るぞ……」

「えっ!! あつ、ちょっと待っててくれませんか？」

直人の帰るそぶりを見て慌てた蔵野は、急いで連絡をしている。

「もしもし、『清』さんですか。……な状況でして」

「くつくくつ、楽しませてもらったぜ……。諦めろ、追加融資はもうで কিনな……」

電話の相手からの言葉に、蔵野は腰を抜かした。そんな蔵野に、次々と報告が上がってくる。

「大変です!! 背後からも敵が現れました」

「……ひい」

直人が去り。数だけの蔵野達は全滅した。

第18話 パンダマン 〵歡喜〵（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第18話 パンダマン 〽歓喜〽

——練馬区：Bar Change——

夜9時、店は最高潮の賑わいを見せていた。忙しく動き回る昌也の携帯に翔からの着信が入った。

「昌也、やったぞぉー!!」

大きな叫び声が鼓膜を直撃した。あまりの衝撃に、昌也は携帯を遠く離し手で耳を塞いでいる。表情は歪んでいた。

あの日以来、翔は華艶に通い続けた。そして、ついにデートの約束をした直後だったらしい。遠く離れた携帯から、喜ぶ声が聞こえるほどだった。

「お、おめでとう……で、どこに行く予定なんだ？」

「おお、パンダが見たいって……」

「そしたら上野動物園か？」

「そうそう。でさ……」

店の営業を終え、昌也は径子と酒を酌み交わしながら話をした。

「恥ずかしいから俺達も来いって……」

「わぁー、私もパンダ見たいー!!」

「勘違いするなよ。翔を影から見守る役目だからな……」

昌也はまだ耳鳴りがするのか、耳を気にする素振りをしていた。

第19話 パンダマン 〜シュンマオ〜（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第19話 パンダマン ～シンマオ～

——台東区：上野駅——

デート当日、快晴だ。あたかも天が二人を祝っているかのようだった。翔は緊張した面持ちで待ち合わせ場所にいた。しかし、30分が過ぎても凜の姿が見えない。

「……（も、もしやドタキャン？）」

最悪の事態を思い浮かべ、緊張と焦りで落ち着かない様子だ。その姿を物陰から見守るように、昌也と径子の姿があった。

「遅いね凜ちゃん……あつ、来た！！ あれそうじゃない？」

無言のまま翔を見ていた昌也は、安堵の表情を浮かべている。

「遅くなつてごめんね」

翔はチャイナドレスを身に纏った姿に見とれている。とても幸せそうな顔だ。

「ねえ？……行こうよ」

「お、おお（可愛いなあ～）」

まだ手こそ握れないものの、寄り添って歩く二人。

「なんだか翔さん、幸せそうだね」

「ああ、幸せになつてもらいたいな……」

——台東区：上野公園——

上野動物園の入口に到着した翔と凜。そして、気づかれないように尾行する昌也と径子。翔は係員の手を持っているプラカードを見て青ざめた。

「うげっ！！ 入場制限だと……」

動物園は連日の大盛況。パンダの人気を甘く見てはいけない。

「只今、大変混雑しております為……」

係員がメガホンで何やらアナウンスをしている。

「さ、3時間待ちだと……!」

翔は呆然と立ち尽くすしかなかった。凜は残念そうな表情を浮かべている。もちろん昌也達にも情報は伝わっていた。

「凜ちゃんって仕事あるんだよね?」

昌也はなんとも言えない表情をしていた。

「残念だけど、しょうがないよね……」

「……（こんな俺に神様は微笑まねえか）」

「仕事まで時間あるし、公園内を散歩でもする?」

凜は笑顔で話しかけた。その笑顔に癒され、一緒にいれる事に幸せを感じた。翔に笑顔が戻り、二人は不忍池の方向に向かって歩き出した。その姿を見届けた昌也。

「大丈夫そうだな。よし、俺達もどっか行くか?」

「映画を見たーい!!」

昌也と径子は、仲良く手をつなぎ映画館へと向かった。

不忍池に沿って歩く翔と凜。仲良く歩く姿に初々しさが漂っている。

「ん? あれは……」

そんな姿を見ていた的屋が何処かに連絡をしている。

「どうした?」

「若頭、翔の奴が目の前を歩いているんで……」

「ばかやろう!! そんな事でいちいち連絡してくるな」

「あ、はい。すいません」

「それより、ちゃんと売れてんだろぅなあ……たこ焼き?」

「そ、そりゃーもちろんですよ……はは」

どうやらこの的屋、【侠狼会】の者らしい。

そんな的屋の慌てふためく姿など御構い無しに歩き続ける翔と凜。

至福の時が流れている。

「でも、3時間待ちだなんて驚いたね」

「いつその事、パンダが檻から脱走してしまえばいいのに……」

「あはっ、入場制限しなくてすむもんね」

しばらく散歩していると会社員と思われる30名程の集団が宴会をしていた。会話が弾み、幸せそうな二人が横切る姿を見ていた。

「ヒューヒューお二人さぁくん、これからどちらまでえ」

「そりゃーそちらに向かつて歩いてるんだから、聞かないでえ」
酔っ払い達の野次が飛ぶ。

「野郎……」

「翔。喧嘩はだめだよ」

凜の言葉にその場をやり過ごそうとする翔。

「中国人を相手にいい気になるなよ」

「いやぁあれはコスプレ好きかもしれんぞ」

ギャーギャーと野次がエスカレートしていく。

「私は大丈夫よ。こーゆーの慣れっこなんだから……」

凜の笑顔だけが翔を押し留める唯一の救いだった。

「へっ、可愛い顔して売春なんじゃねーのか。お金なら沢山……」

凜の表情から笑みが消えた。その瞬間だった、翔は集団に向かって走り出した。

「テメーラみたいな奴らがいるから、何もかもが歪むんだよ……」

うおお……（我に眠りし修羅よ今目覚めよ）

「翔……」

瞬時に野次を飛ばしていた5人の顎を砕き、残りの集団に殺気を放った。恐れ慄きながら減らず口を叩く会社員。

「お、お前、亀柴商事に手をだして、ぶ、無事でいれと思うなよ」

「亀柴商事ですって……」

何やら凜の表情が硬い。

「だまれ狐共がっ！！ 虎のお出ましを待っててやるから早く呼べ

や……」

翔は目で会社員達を殺している。

「翔、もうやめて!!」

「呼んだかね？」

どこからともなく声が聞こえた。辺りを見回し、ざわつく会社員達。

「どこだ？」

「いた!! あそこの屋根の上だ……」

発見した会社員が指差す先に、背を向け仁王立ちしている何者かの姿があつた。翔と凜もその先に視線を向けた。

「……本当に脱走？」

「シユンマオ!!」

凜に笑顔が戻り、目が輝いている。会社員はその異様な姿にざわついている。

「なんでパンダがここにいるんだ？」

「馬鹿、どう見てもきぐるみだろ……」

「何者だお前は？」

パンダのきぐるみを着ている様に見える。男は振り返って語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する正義のヒーローだ!!」

事態がよく飲み込めないのか、静寂が辺り一面を覆いつくした。

「自分でヒーローって言っちゃったぞ、あいつ……」

会社員の一人が口を開いた。

「ちっ、ただの変態か……」

翔は見下した目線でパンダマンを見ていた。

「大丈夫だよお嬢さん、何も言わなくていい。状況は把握できた……」

屋根から飛び降りたパンダマンは、一目散に翔を目掛け襲いかか

った。

「お前が悪の元凶だな……問答無用!!」

「ちょ、ちよっと、違う……」

「……邪魔だ」

翔の裏拳でパンダマンはあっさりぶっ飛んでいった。

「……弱っ!!」

会社員の面々はあまりの弱さに驚いた。

「ちっ、邪魔が入ったが亀柴商事が何だって？」

再び会社員達に向かって歩き出す。すると背後から気配を感じ、翔は振り返った。

「（【変身：鬼熊】俺をこの姿に変えさせるとは……」

「鬼熊」熊の妖怪。怪力の持ち主で、人と同じように直立歩行し、家畜の牛馬などを襲う。

パンダマンは【妖怪：鬼熊】に変身していた。

「どっちにしろ、俺には勝てんと思うが……」

「ぐがぁあ!!」

雄叫びと共に振り下ろされる熊手。防御はしたが、その威力をまともに受けた翔は片膝を着いた。

「くっ……（パワーはあるみたいだな）」

翔とパンダマンの一身一体の戦闘が続く。会社員の一人が何処かへ連絡をし始めた。

「もしもし、社長ですか。お忙しい所申し訳御座いません」

「どうした？」

「上野公園で飲んでるんですが……」

社長に状況を伝え、助けを求めるている。

「ほお……（“皆殺”の翔だな……）」

「……どうしたらよろしいでしょうか？」

「お前達じゃ100人いても敵わんよ。今のうちに逃げときな」

「……はい。分かりました」

全員にその旨を伝え、翔とパンダマンの戦闘が続く中、隙を見て次々と逃げていった。

「ちっ……（しぶといな。こっちも全力でいくか）」

「ゼエ……ゼエ……（なんだこの強さは……）」

「（【潜在：ヘーパイストス】）火鳥扇！！」

「ヘーパイストス」ギリシア神話の火山・炎・鍛冶の神。

翔とパンダマンの間を火炎の扇が通過した。翔は目を真ん丸にして凜を見ている。

「シユンマオ……ちよつと待つて！！」

凜は火鳥扇を持ったままパンダマンに近づいて行った。

「アチツ！！（動物に火を向けないで……）」

「勘違いよ。悪いのは……」

凜が見た先に会社員達の姿は消えていた。

「あのね、この人は……翔は私の……」

「……えっ（何？）」

翔はドキッとした表情で凜を見ている。

「冷静に状況を把握したんだが……私の勘違いでしたね」

「あっ！！（こらパンダ野郎、話を遮りやがって）」

翔はパンダマンに向けて変な顔をしている。

「大変申し訳かった……危うく怪我をさせてしまふ所でした」

「こらこら……（よく状況を見ろ！！）」

翔は怪我をしてるのはお前だよって顔をしている。

「助けてくれようとしたんだね。シェイシェイ」

「なあゝに、礼には及ばん。正義のヒーローの宿命さっ！！」

言いたい事を言い切ったのか、パンダマンはふらふらとよろめきながら去って行った。

「ちっ、あいつのせいで逃がしちゃったじゃねーかよ……」

「翔……ありがとう」

涙ぐんでいる凜をそつと抱きしめようと両腕を広げた。

「あつ、大変！！ 仕事の時間に遅れちゃう。帰らなきゃ……」
両腕は広げられたままフリーズしている。

「そ、そうだね。帰ろっか……」

次に会う約束を言い出せないでいた。

凜を上野駅まで送り、翔は一人公園のベンチでたそがれた。

第20話 靖国神社 へ参拝へ（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第20話 靖国神社 へ参拝へ

——千代田区：靖国神社——

蝉の歌が最盛期を迎えている。降り注ぐ日差しが心地よさを通り過ぎ苦痛に変わる季節。

翔は昌也に誘われ、見知らぬ場所をひたすら歩いていた。

「なにっ！？ それで抱きしめられずに帰ったのか……」

「……うるせえなあ」

「まったく、情けねえ。そこは抱きしめるだろ絶対に……」

どうやらデートの出来事を話しているようだ。

「……それより、何処に向かってんだよ？」

「んっ、靖国神社だ」

「神社だと！？ ……俺は用がねえから帰るぞ」

「まー付き合えよ、参拝するだけだからさ」

「参拝？ 近くの神社で済ませればいいだろ」

「この時期は特別なんだよ……」

二人が境内の入口に到着すると、そこには大勢の警察官がいた。

「おい、警察官が入口を固めてるぞ。目的は俺か？」

「……馬鹿。警備に決まってるんだろ」

「な、なんで警察が神社を警備するんだよ？」

「この場所は、今日が一番危険な日だな……」

昌也は説明するのも面倒臭くなったのか、境内へ入って行った。翔は警察を気にするようにチラチラと見ながら昌也の後を追った。

「いやあゝ暑いですね。署長自ら警備に付かなくても……」

「……上からの命令だよ」

司はあからさまに不満な顔をしていた。

翔と昌也は境内のジャリ道を歩いている。すると車道の方から演説が聞こえ二人は振り向いた。

「……の行為に対し、多くの国民やアジアの近隣諸国が……」
選挙カーの上から政治家が汗だくになって話をしている。

「ったく、このくそ暑いのに大声でうるさいんだよ（あれ、どっかで……）」

「うわっ！　こんな所で一郎さんに会えるなんて……」

苛々している翔とは対照的に、昌也は目を輝かせて政治家を見ている。

「……は？」

「お前の事だから知らないとは思うけど……一郎さんはなあ、この国の将来を本気で考えてくれている最後の大物なんだぞ……！」

政治・経済について熱く語り始た。

「あ、ああゝ息苦しい……」

暑さに加え、昌也が語る訳の分からない話が翔の脳みそを混乱させた。

ジャリ……ジャリ……。翔は白杖を手にした視覚障害者が向かってくる音に気がついた。

「おい昌也、じゃまだから道をあける（むむっ、どっかで見た気が……）」

翔の声に、熱中していた昌也も気づき道をあけた。

「すいません、どうぞ」

「ご親切に、ありがとうございます」

ジャリ……ジャリ……。歩行者はお礼を言って通り過ぎていった。昌也は無言のまま見ている。

「……（あの人、もしかして）」

「気の毒だっと思ってたら失礼なのは分かっているけどさ……」

翔は視覚障害者の背中姿を見つめながら、大変そうだなって表情を浮かべている。

「……平和で豊かなこの国を……」

「うるせえなあ……まだ話てんのか」

「お前なあ。一郎さんって人はだな……」

話が振り出しに戻ってしまった。翔は両耳を塞ぎ、神社の方向へ歩き始めた。

神社に近づくと、大慌てでウロチヨロウロチヨロしている巫女がいた。

「ああーどうしましょう。よそ様の所は使い勝手が解かりませんわ」

「おっ！！ 巫女がいるぞ」

「神社なんだから当たり前だろ……」

「あーはいはい。さっさと参拝終わらせようぜ」

二人は神社へと消えて行った。

第21話 靖国神社 リジューム（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第21話 靖国神社　リジューム

——中央区：リジューム——

銀座NO.1ホステスの美咲が経営する高級クラブである。

銀座のきらびやかな風景を更に引き立てる豪華な建物は、道行く人の目を引いた。そこへ、演説を終えた一郎が足を運んでいた。

「先生、今日の演説お疲れ様でした」

「ふははは、さすがママ。もう情報が……」

「ふふ。私の知らない情報などありませんわ」

経済界から裏社会まで、美咲の交友関係は広い。

「今日はとても多くの皆様に聞いて頂けた……」

今から演説を始めるかの様に、まだまだこの国は良くなると熱く語り始めた。

「相変わらず真面目で熱い人ね」

「志を翳して……もう20年か」

志や熱い思いだけでは、国を変えることが出来なかった。今、その一つ一つを思い起こし溜め息をついている。

「ふふ。あの頃の先生は可愛かったわ……」

「こ、こら……恥ずかしいからその話はやめてくれ」

今年で齢63を迎えた。議員1年目、駆け出しの頃の自分を思い浮かべ照れている。

「しかし……いつまでもママは美しい、あの頃のままだ」

「ふふ。お上手ですね、先生」

一郎はお世辞ではなく本音でそう言っている。瞳を見つめていると知らぬ間に美咲の魅力に吸い込まれていた。

「先生、そんなに見つめられたら恥ずかしいですわ」

「えっ、あっ……あの、弟さんは元気にしてますか？」

「お蔭様で、その節は……」

美咲は深々と頭を下げている。

「で、では。そろそろ……」

帰ろうとする一郎に美咲が耳打ちをした。

「先生、最近不穏な動きが御座います。ご用心を……」

「ありがとうございます……」

一郎はリジュームを後にして、事務所へと帰って行った。

第22話 靖国神社 〱刺客〱（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第22話 靖国神社 へ刺客へ

——千代田区：某所——

日付が変わる頃、車を降りた一郎は事務所へ到着していた。ドアを開けると、遅くまで残っていた秘書が出迎えている。

「先生、おかえりなさい」

「ああ、遅くまでご苦労様」

「あの、ご友人の方が奥の部屋でお待ちですが……」

「分かった、ありがとう」

「先生はお茶でよろしいですか？」

「ありがとう。今日は一日疲れたろ、もう帰りなさい」

「あつ、はい……」

一郎と友人の邪魔をしてはいけないと、秘書は身支度を済ませて帰っていった。

一郎は秘書の姿を見届け入口のドアに鍵をかけた。そして、奥の部屋へと入って行く。中には男が一人、背を向けソファに座っている。一郎は反対側に腰掛けた。

「ご配慮、ありがとうございます」

「……で、用件はなんだね？」

「本日の演説はとても良かった、と伝言を預かっております」

「それはどうも……」

一郎はこの男と面識がない。しかし、何故ここに居るのは大体見当がついていた。

「しかしながら、いつまで続けても何も変わりませんよ」

「ふははは、それは最後まで判らんだろ……」

「残念ですが、今日がその最後の日……」

突然、男は隠し持っていた短刀をチラつかせ立ち上がった。

「刺客か……だいたい見当はついているがな。お前さんは“国取り”の手の者だろ？」

「……そこまで分かっているとは、流石だな」

「お前ごときでは殺せんよ……」

「ほざくな老いばれ!!」

一郎は二人の間にある机を咄嗟に蹴った。男は弁慶の泣き所に机があたり、短刀を握ったままうずくまっている。

「悪いがまだ死ぬ訳にはいかんのでな……（【変身：閻魔】）」

「閻魔」 仏教の地獄の主。冥界の王・総司として死者の生前の罪を裁く者。

一郎の姿は巨大化し【閻魔】に変身した。その姿を見た刺客は、恐れ慄いている。

「この姿を見たからには死んでもらう……魔道波!!」

一郎の掌から暗黒の波動が解き放たれた。あっけなく刺客の姿は、溶けて消えていった。

第23話 歌舞伎町 〓トレーダー〓（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第23話 歌舞伎町 〱トレーダー〱

——品川区：某所——

「あん……もう……そう、そっち……」

トレーディング画面を眺めている。自宅で一人、瞳は呟いていた。世界中が不況一色で染められたこの時代。個人投資家として日々画面に向き合う生活を送っていた。

「うん、今日は300万円の利益か……」

世間では耳を疑いたくなるようなお金の動きである。

「……あそこで仕掛けていたらなあ」

一瞬の判断ミスが多額の損失に直結する世界。

「でも、タラレバ言ってちゃ駄目だよな」

……運命と同じように。

「うーん、為替はいいかな（動きがなさそうだし）」

気分転換にと携帯を手に取り夕食の誘いを友人にした。

——新宿区：アルタ——

瞳は、待ち合わせの時刻より少し早めに着てしまい、アルタ前を行き交う大勢の人々を見ていた。

「あの映画良かったな……香織は泣きすぎだけど」

「だって本当に泣けたんだもん。まこっちゃんだって……」

通りすぎるカップルの会話が聞こえてきた。

「……（デートかあ）」

異性との触れ合いからすっかり遠ざかっていた。

「ごめん。待った？」

「私も今来た所よ……」

恵子が姿を現した。看護学校の時の友人である。二人は高級レストランへと入って行った。

「でも、瞳が看護職から離れるとは以外だったわ」

「……そう？」

「だってあなたは主席で卒業して、あんないい病院に就職したのよ……」

瞳は優秀な看護師として将来を期待されていた。

「……。でも、恵子が今日お休みで良かったわ」

「タイミングだけはいいのよねー私」

「お仕事は、順調？」

「そうね。色々あったけど順調よ」

友人の幸せそうな表情に笑みを浮かべている。

「今はそのトレーダーって仕事をしているの？」

「うん。仕事って呼べる程の物じゃないけどね」

「難しそうで私には分らないわ……それよりね……」

恵子は最近通い始めたホストの話を始めた。

「そうなんだ。でも、あまり興味がないわ」

「瞳も長い間彼氏いないでしょ。社会勉強だと思って、どう？」

社会勉強だなんて、都合のいい話である。

「（夕食付き合ってくれてるし）……今日だけだからね」

「うん。わかってる」

二人は歌舞伎町へと向かって行った。

第24話 歌舞伎町 くデュアルコアく（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第24話 歌舞伎町 〱デュアルコア〱

——新宿区：デュアルコア——

歌舞伎町N o . 1の麗がいるホストクラブである。

接客中の麗にホストが耳打ちをしている。

「美雪さんがお見えです」

「うなずく麗。もうすでに10名以上の指名客が来店していた。

「申し訳ありません。指名が入ったようなので……」

「ええーもういつちやうの？」

「すぐに戻って来ますよ……」

麗は甘いマスクで微笑み、その卓を離れて行った。

「どうも初めまして静香さん……」

指名者が卓を離れると、ヘルプがその卓を受け持ち盛り上げる。

「初めてじゃないでしょ、あなた……」

「あははは、ばれました……」

「あーあ、やっぱり高いお酒でも入れないと長くいてくれないのかしら……」

そんな時、店内に響き渡るようにマイクパフォーマンスが入った。

「8番テーブルのお客様より、ドンペリ・プラチナ頂きましたー！

」！

「ありがとうございますーすー！」

「ホスト……集合……」

合図と同時に店内のホスト達が8番テーブルを囲みパフォーマンスが始まった。シャンパンなどを注文するところといったサービスが受けられる。

その頃、瞳と恵子はデュアルコアに到着していた。

「いらつしゃいませ恵子さん!!」

ホストに名前を覚えられる程、恵子はこの店に通っていた。

「お隣の方はご友人ですか？」

「初めてなの。S券で入れるかしら？」

「もちろん大丈夫ですよ」

二人は席へと案内された。店内は薄暗いが高級感が味わえる豪華な造りになっている。まもなくして、恵子ご指名のホストが現れた。

「恵子さんいらつしゃい!! お友達の方初めまして達也です!!」

異様にテンションが高い。瞳は軽く会釈をした。指名者がいない瞳のようなフリーのお客に対しては、まだ駆け出しのホストや指名を取れないホストから接客をするのが通常である。

「ねえ達也。麗さんをここに呼べないの？」

「えっ!! (NO・1ホストがS券に来る訳ないだろ)」

「私の友達なの、美人でしょ。楽しませてあげたいのよ……」

「……無理だよ」

「またそー言つて、麗さん呼べないんでしょ？」

「……(当たり前だ!!)」

二人の会話を聞き入っているだけの瞳。

その時だった、瞳達の卓の前を偶然にも麗が通り過ぎた。

「あつ、麗さん!!」

恵子の呼び止める声に麗は立ち止まり振り向いた。

「いらつしゃい。恵子さん」

「あの、友達なんですが……」

麗は恵子の隣に座っている瞳に目を向けた。しばらく無言で見つめ合う二人。

「後で来てもらえませんか？」

「もちろんですよ」

麗は微笑みを残し次の指名客の元へ向かった。

「はぁ……素敵。指名変えちゃおうかしら？」

「おいおい。俺は心臓がバクバクしてたぞ……」

「あの人……（とても哀しい目をしてた）」

営業時間も終わりに近づき、へべレケな達也と恵子。代わる代わるホスト達は来るものの、麗の姿は無かった。麗の存在・瞳の存在も忘れてしまい、達也と恵子は二人で何処かへ行ってしまった。

「あーあ、私も帰ろう……」

取り残された瞳は、一人店を後にした。

第25話 歌舞伎町 〰 一番街〰 (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第25話 歌舞伎町 一番街

——新宿区：一番街——

午前4時前後、歌舞伎町が最も危険な時間帯を迎える。

始発待ちをしている一般人の酔っ払い・お茶引きホスト達のキャッチ、麻薬の密売人・付随したチンピラ、ゴロツキ達。そして何よりも最も危険な繁華街、眠らない街：歌舞伎町。その元締め組員達が蠢いている。

そんな凶悪な輩達に目を光らせている歌舞伎町交番の精鋭警察官。まさに一触即発のピークを迎える時間帯に、瞳は何も知らずに一番街を歩いていた。

「まだ、時間早いけど始発動いてるかな」

コマ劇付近に差し掛かった時だった。案の定、ゴロツキ達に取り囲まれる。

「……（ちょ、ちょっと何？）」

それを見ていた組員達が近寄ってきた。すぐにゴロツキ達は逃げる。弱肉強食の世界。

「ほお、こりや上玉だな」

瞳を囲む組員達の元に車がまわされ、連れ去られる瞬間だった。

「俺の連れだが何か？」

そこには麗の姿があった。

「なんだあ……へっ、ホストかよ。ホストごときが首を突っ込むんじゃない!!」

麗は3人の組員に囲まれた。

「お前ら【侠狼会】の者か？」

「知っているなら話は早え……判るよな？」

「麗さん……」

瞳の弦きを聞いた他の組員が叫んだ。

「麗だと！？……お前ら手を出すな！！」

時既に遅し、3人は地べたに転がっていた。

「ちっ……女は返せばいいんだろ。行くぞ！！」

【狭狼会】の連中は車に乗り込み、逃げるように去って行った。

麗は瞳の元へ優しい笑顔で歩み寄った。

「あの……ありがとうございます。ご迷惑をお掛け致しました……」

「とんでもありません、私の方こそ約束を守れなくて申し訳なかった……」

麗は卓に来说と言った約束を守れなかった事を詫びている。

「よろしければ、始発までお話しませんか？」

投資家とホスト。畑は違えど、己の裁量のみで生きる共通点に瞳は心を開き始めた。

「……はい」

二人は朝靄のかかる場所へと姿を消した。

第26話 刺青 く俠狼会く（前書き）

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第26話 刺青 く俠狼会

——板橋区：俠狼会事務所——

今は亡き初代俠狼会・会長。名立たる勢力を駆逐し、至弱から至強の組織へと導いた偉大なる人物。その血を受け継ぐ重慶、若干28歳。現在は父親である三代目会長が君臨しているが、とにかくこの親子……とても仲が悪い。

ある日、重慶は大きなソファ―に腰掛けていた。両腕と腰元に裸の妾を侍らせ、快楽に浸っている。そんな最中である、部屋の扉が開き若い衆が入って来た。

「若頭、本隊の奴らが『麗』とトラブルになったとの情報が……」
「……“孤高の剣豪”か？」

「はい、出勤命令が出ておりますが……」
「放っておけ……ったく、自分のケツぐらい自分で何とかしろってんだ!!」

怒気を含んだ言葉に、腰元の妾がビクつと反応した。

「おつ、すまねえ驚かせたな。続けてくれ……」
妾の背筋を撫でながら目を瞑り、再び快楽に浸っている。

「それよりも、亜門会の動きは掴めたのか？」

重慶の問いが聞こえたのか、部屋の扉が開き一人の男が入ってきた。

「それは私からお話しましょう」

「李伯か……『翔』の件はご苦労だったな」

「いえ、これで本隊も簡単には手を出せないでしょう」

「あいつとの決着は俺が着けるんだからよ……」

目を見開き、不敵な笑みを浮かべている。

「若、亜門会についてですが……この1年足らずで急速に成長して

おります」

「資金源でも確保したのか？」

「詳細は掴めませんでした。が、何者かが後ろ盾している事は確かです……」

「麻薬の売買までは目を瞑ってやるつもりだったが……」

急速に勢力を拡大させている亜門会。特に敵対的關係でもなく、度々侠狼会の島に姿を現していた。しかし、人身売買にまで手を染めた輩に、道無きと判断した重慶の怒りを買ってしまった。

「決行日は今夜だ。あいつらにもそう伝えておけ……」

「……わかりました」

李伯と若い衆は部屋を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860y/>

悪がまに

2011年11月23日13時47分発行